

## 深い洞察と叡智

山下 元利

大蔵省の後輩であつた私は、長い間いろいろの機会に、先輩としての大平首相に心をかけていただいたが、直接仕事の上でお仕えたのは、国務大臣防衛庁長官としてつとめたのがはじめてといえる。

ただ、大蔵省の現役時代、一度だけ、しかもごく短い間のことであつたが、大平課長の下で勤務した履歴がのこつていたのである。昭和二十五年、当時大蔵省大臣秘書官をされながら国税庁間税部消費税課長を兼務されたことがある。占領下の国家公務員についての人事政策による異例のことであるが、その時、私はその課長補佐であつた。

これはあくまで肩書だけのことであつて、秘書官としての仕事に専念されておつたのであり、間もなく政界に進出された。当時、村山達雄先生などと一緒によくゴルフの同伴をしたことがある。

いつであつたか、帰りの車中で、どのような話のはずみであつたか忘れたが、あの独得のジェスチャーで、頭のまわりをかかえながら、「なあ、山下、頭のなかは借金で一杯だよ」といわれた。

代議士としていろいろの雑事が多いことをいわれたのであるが、さて自分が代議士になってみてはじめて、しみじみとその時のこ心境が分かるようになった。

はじめて台閣に列する、国務大臣になる感激と喜びは格別のものである。鳩山内閣の首相秘書官、田中内閣の官房副長官としてつとめた私にとって、首相官邸は馴染の深いところであるが、それでも、昭和五十三年十二月

七日夜、呼び込みをつけてその玄関に立ったときの気持は、どう表現すればよいものか。首相執務室において大平首相から正式に防衛庁長官をつとめるようにいわれて、心から最敬礼をした。

防衛庁長官在任は約一年間であったが、その間をふり返って今更に思うことは、大平首相がよく閣僚を信頼してまかされたということである。そして、各閣僚もそれだけに責任をもって仕事をしたと思う。重要な事柄については直接指示を仰いだことも再々あったが、大所高所に立つての決断は、深い洞察と叡智にもとづくものであった。

去年五月、衆議院の総選挙の前に、大津市にきていただいたことがある。自民党滋賀県連主催の政経文化パーティーに自民党総裁として出席していただくためである。見事に晴れ上がった空の下で、琵琶湖のほとりの会場を埋めつくした参会者の前で、力強く切々と訴え、人々に深い感銘を与えられた。間もなく逝去されることなど露ほども感じさせないお元氣さであっただけに、いま当時の情景を思い浮かべながら心が痛むのである。

そのあと、歴代首相としてははじめて、船による琵琶湖視察をしていただいた。ちょうど赤潮が発生した矢先で、観測船がくみ上げた水に見入っておられたのも、印象にのこる一駒であった。

当時、滋賀県連会長としてお伴していた私であるが、帰路につく船上、うとうと居眠りをしたようである。ふと気付くと、ななめ前に坐っておられた首相のにこやかな顔が、私の方にむけられていた。「おい、どんな夢を見ていたんだい」といわれて、とっさのことであり、頭をかきながら、ひたすら恐縮したものである。

(衆議院議員・第一次大平内閣防衛庁長官)